The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	王之春の「東京雑詠」「東京竹枝詞」
Author(s)	深澤, 一幸
Citation	言語文化研究. 2011, 37, p. 141-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

王之春の「東京雑詠」「東京竹枝詞」

深　澤　一　幸

本論文要探討的是清朝末年被派遣到日本,調查日本軍備等諸事情的知識分子王之春,在日本首都東京,看見甚麼,有甚麼感受,怎樣表現為詩歌,以便了解中國知識人對當時總算先進的以東京為中心的明治文化有甚麼印象。這對於日中文化比較研究也有一些幫助。

キーワード：何如璋、張斯桂、黄遵憲

1

中国では清朝末期の光緒五年、日本では明治12年、1879年12月7日から翌1880年1月5日まで軍備など諸事情を探るため日本に派遣された、高官にして湖南・清泉のひと王之春（1842－1906）は、帰国後に日本旅行時の見聞や感想をまとめ、光緒六年（1880）秋、「談瀛録」三巻として上洋文藝斎から刊行した。巻一、巻二は「東遊日記」と題し、その旅程を詳細に記述、巻三は「東洋瑣記」と題し、日本の国情を簡潔に紹介する。その中には王自身が東京の文化・風俗について詠った「東京雑詠」８首の連作、「東京竹枝詞」13首の連作があり、当時の中国の知識人が日本という新興の島国についていかなる感懐を抱いたかを知るうえで、きわめて役に立つものである。そこで以下は、東京都立図書館実藤文庫蔵本「談瀛録」により、この二組の連作を読んでいくことにする。

ところで、王の東京連作を読むにあたって、必らず参考にすべき三人の人物の三種の詩集がある。まず、王がはじめて東京の公使館を訪れた日の記録、「談瀛録」巻一、光緒五年十一月初三日を引こう。

> 辰（午前８時）後、仍(な)お火車に乗り、東京に往く。公使衙門に至り、何子峨・張魯生両星使を拝す。款宴を蒙(こう)むること甚はだ殷(さか)んなり。横浜より東京に至る火車の往返は事を費やすを以って、該署に留住し、并せて参賛の黄君公度に晤(あ)い、其の「日本雑事詩」を読むを得たり。風土を采録すること甚はだ詳し。是の晩、両星使と暢談し、三点鐘に至りて始めて就寝す。

ここに登場する三人こそ、東京での王の詩作にとってもっとも深い関わりをもったのである。

まず駐日公使の何如璋（1838－1891）。かれは、号は子峨、広東・大埔の人で、「袖海楼詩草」二巻、「袖海楼文稿」一巻、「何少詹文抄」三巻の著作がある。王の来日より２年前、光緒三年（1877、明治10年）十月に、初代の出使日本大臣として、副使張斯桂、参賛黄遵憲らをひきつれ東京に赴任し、光緒六年（1880）十一月まで在任した。上海から東京到着までの道中の見聞を竹枝詞スタイルでうたったかれの連作「使東雑詠」全65首は、王と同様、やはり日本の諸風俗などを紹介し、王が最も熟読した書物である。この詩集を含む日録「使東述略」も重要である。

そして、「談瀛録」十一月初三日に収める「何子峨星使に贈る」詩には「異域　共に欽(つつ)しむ蘇属国（漢の匈奴に使いした蘇武）、神洲　重ねて駐(とど)む白香山（唐の詩人白居易）」という句もあり、何の詩作にたいする評価も高いようである。

つぎは駐日副使の張斯桂（？－1888）。かれは、号は魯生、籍貫は浙江・寧波。かつては沈葆禎・曾国藩の幕下にあり、容閎・曾紀澤らと交流があった。またヘンリー・ホイートンの「国際法原理」をアメリカの宣教師ウィリアム・マーティン（漢名は丁韙良）が漢訳した「万国公法」（1864年11月刊行）に序文を書き、英仏露米の富強のゆえんを述べている。そして「遊藝斎雑著」一巻の著作がある。

かれも何如璋と同様、光緒三年に上海から東京まで様様なスタイルで詩作し、詩集「使東詩録」（光緒十九年刊、王錫祺輯「小方壺斎叢書」第四集）全40首にまとめた。これも王は熟読したろう。

かれが1882年に副使の任を終え日本から帰国して後の経歴としては、わが岡千仞の「観光紀遊」巻六「燕京日記下」1884年11月10日に、公使の榎本武揚の「魯生の京に来たりて修補すること、今において五年、醇邸（道光帝の子で醇親王だった奕譞(えきけん)）に賄いすること、已に三千金。彼は老耄にして、将(は)た何をか為さん」という同情の言葉を書き留めている。のち広平府（河北省永年県）知府となり、在任中に死去した。

そして、同じく十一月初三日の「張魯生星使に贈る」詩に「回紇は自のずと応に徳望を欽しむべく、雞林は何ぞ止だに詩名を慕うのみならんや」の句があり、あなたは「回紇」ウイグルにたとえるここ日本でも「徳望」が高まり、「雞林」朝鮮にも詩名がひろまった白居易のように「詩名」もとどろくだろう、がそれだけではない、と期待する。

三人目は駐日参賛の黄遵憲（1848－1905）。かれは、号は公度、広東・嘉応州の人で、「人境廬詩草」十一巻がある。かれは、当時の日本の国政・民情・風俗・物産を、竹枝詞のスタイルでうたいあげ、それは「日本雑事詩」二巻、全154首として、光緒五年孟冬、北京の同文館から聚珍板として刊行された。さきの、王が「読むを得た」と述べる「日本雑事詩」は、内容はこのテクストと同じだろう。しかし「他日諸(こ)れを棗梨に付す」というからには、おそらくまだ黄遵憲の手元にあった自筆稿本を見たのだろう。

そして、王はこの「日本雑事詩」にすっかり感服している。「談瀛録」巻三から、そのことを明らかに示す一条を引こう。

「山海経」（夏の禹王の作とされる地理書）は倭国の事を載すと雖も、而るも詳晰ならず。歴代の史志は該部の輿地・風土に於いて、亦た未まだ考拠典確する能わず。惟だ「籌海図編」（明の胡宗憲の著）のみは、較べて詳尽と為す。然れども述ぶる所の薩摩の事は、亦た影響附会多し。（明の）宋濂の集に「日本曲」十首有り。「昭代叢書」（清の張潮の輯）に沙起雲の「日本雑詠詩」有り。而れども僅かに長崎の民風有るのみ、文も亦た浅陋なり。朱竹垞（清の朱彝尊）の収むる所の「吾妻鏡」（鎌倉幕府の事跡を漢文で編述した史書）一部は、均しく罣漏有り。蓋し其の時は海禁未まだ開かず、且つ輪舶の往来無し。士大夫は均しく風涛険悪なるを以って、其処に前赴するを肯んずるもの莫し。故に未まだ諸れを紀載に形わす能わず。

近ごろ参賛の黄君公度の著わして「日本雑事詩」数巻有るを見るに、政事の沿革、年代の逓嬗と、夫の山川・風土・服飾・技芸とに於いて、考証典確し、一一之を筆にす。他日、諸れを棗梨に付さば、知んぬ必らずや先を争い覩るを快とする者有らんことを。

また「談瀛録」巻一、十一月初四日には「参賛の黄君公度の日本雑事詩の後に題す」詩四首を収めるが、いまその第２首をあげよう。

灑落丰儀黄叔度　灑落たる丰儀　黄叔度
汪洋萬頃浩無涯　汪洋万頃　浩くして涯無し
懐中握有靈珠在　懐中　握りて霊珠の在る有り
寫出生花絶妙詞　写き出だせば花を生ず　絶妙の詞

そして、以上の公使・副使・参賛による画期的な三種の詩集については、張斯桂歿後の光緒十九年（1893）仲夏、かれの残した「使東詩録」をみずから輯めた「小方壺斎叢書」第四集に収録し、また「小方壺斎叢稿」二十八巻の著作をもつ江蘇・清河の人王錫祺（1855－1913）が、「詩録」に付した「跋」でその歴史的意義を説いていう、

光緒丙子（二年、1876）、朝廷は特使を派して日本に駐せしむ。命を承わる者は、正使の何公如璋、副使の張公斯桂、参賛は則ち黄君遵憲也。何著の「使東述略」「使東雑詠」は、坊間に刊本有り。黄著の「日本雑事詩」は、長洲の王韜が聚珍版を以って之を印す。張著は独り未まだ見ず。曩に聞くならく、涂君紫巣は言う、「公は少くして大志を負い、書を読むこと等身、中年は策を挾みて当道に干め、之を久しゅうして乃ち知を沈文粛（葆楨）・曾文正（国藩）に受く。欧州の通商諸国を以って春秋の戦国に媲ぶ、論は実に公自り創まりし也」と。余は庚寅（じつは庚辰、光緒六年）海に泛び、周小棠師の書を持ちて公に東京に謁するに、須眉は蒼古、藹然たる儒者にして、其の必らず大用さるるは決せり。詎んぞ節を返して後、一たび広平府（知府）に任じ、志を賫らし遽かに歿すとは、惜しい哉。此の詩は之を伝鈔に

得たるに、物を体して瀏亮、情に縁りて綺靡、「雑詠」「雑事詩」と「三絶」と称するに堪う。之を録し以って一時の使才の盛んなるを志(しる)すと云う。

「涂紫巣」は、上海の著易堂書局の主人。光緒十六年（1890）、息子の筱巣とともに上海の河南中路広東路に著易堂を創立し、翌年、王錫祺が一千二百種の書を輯めた「小方壺斎輿地叢鈔」を鉛印出版した。「周小棠」は、周家楣（1835－1887）、小棠は号、江蘇・宜興の人、「期不負斎文集」五巻がある。光緒四年、順天府の尹、兼ねて総理各国事務衙門大臣となり、外国使臣との接見や外交事件の交渉などを担当していた。

さて、本論文は、とにかくこの「三絶」を参考にしつつ、王の詩作を読みすすめる。そのテクストとしては、鍾叔河編「走向世界叢書」第三冊（岳麓書社、2008年10月）を用いる。

2

まず、「談瀛録」巻一、光緒五年（1879）十一月初二日に収める「東京雑詠」全８首から見ていこう。その第一首。

居然半壁奠金甌　居然たり　半壁　金甌を奠(さだ)む
到此無妨往蹟捜　此こに到らば往蹟を捜すに妨げ無し
滅裂冠裳尚西律　滅裂たる冠裳は西律（西洋の習俗）を尚び
教人無奈起深愁　人をして奈(いか)んともする無く深愁を起こさしむ

前半二句は、日本が古い中国の伝統をよく保存していることをいう。「居然」意外なことに、海東の日本は「半壁」天下の半分ともいうべき「金甌」完全無欠の国家を「奠」定めており、ゆえに「此」日本にやって来ると、中国では消滅した「往蹟」古来の中国文化の遺物を捜すのに都合がよい。「金甌」は、欠けたところの無い黄金のかめで、外国の侵略を受けたことの無い独立国家をいう。「南史・朱异伝」に「我が国家は猶お金甌の若く、一の傷欠も無し」とある。

そして後半では、明治の洋化政策により、「西律」西洋の制度・風俗をたっとぶあまり、中華の伝統を継承した和服をやめて、滅茶苦茶な衣装、洋服に着替えた日本人に、深い愁いを抱くのである。つぎは第二首。

一衣帶水徑相通　一衣帯水は径(ただ)ちに相い通ずるも
屏蔽東藩等附庸　東藩を屏蔽(さえぎ)りて附庸に等しうす
太息唐時舊典物　太息す　唐時の旧典物
泱泱留有古齊風　泱泱（立派で大きい）として留めて古えの斉の風有り

「一衣帯水」の海は、「東藩」東方の藩国日本を隔てて、本来そうでないのに「附庸」属国に貶める。「談瀛録」巻三「東洋瑣記」には日本人の起源を述べて、「其の種類は中土自り伝わる。流寓すること既に久しければ、風気は迥(はる)かに殊なれり。大抵は、男は笨にして女は慧く、形は細かにして質は柔かし。・・・今該国には尚お徐福の祠有り、熊趾山には復た徐福の墓有りとせば、則ち日本の祖、其の我が中土より出でしに係るは疑い無し。而るに「日本通鑑」（林羅山・鵞峰父子の編になる「本朝通鑑」三一〇巻、寛文十年成立）を作る者は則ち以って周の泰伯の後と為す。乃ち源光国（「大日本史」三九七巻の監修者徳川光圀）すら尚お之を駁して曰わく、「日(にほん)を謂いて泰伯の後と為す、是れ日を視て中華の附庸国と為す也」と。頼襄（山陽）の「日本政紀」（天皇中心の史書、十六巻）を為すに至りては、則ち徐福の事をも并せて、亦た屏(しりぞ)けて書かず。然らば則ち将(は)た日祖は空桑より出づと為すと謂える乎(か)。抑(そも)そも将た蝦夷の後裔為(た)るを自認する乎(か)。夫れ子孫は微賤に出づと雖も、典を数えては猶お忘れざるを貴とぶ。明明に聖賢の後に出でしに、顧って同族の附庸を以って疑いと為し、削りて書かざるに至るは、亦た何ぞ所見の陋しき邪(や)」とあり、日本の祖先は中国の「中土」中原にいた「聖賢」たる漢族であり、周のとき甥の文王に国を譲って南方の荊蛮に逃れた呉の泰伯ではない、つまり中華の附庸国たる南蛮の後裔ではない、と、日本人の一部にあった説を非難する。

また第四句については、「春秋左氏伝」襄公二十九年に、呉の公子季札が魯に使節としてやって来て、周の楽舞を観たいと請うたので、楽工に「斉風」を歌わせたところ、季札は「美なる哉(かな)。泱泱たる乎(か)。大風也(なる)哉。東海を表す者は、其れ大公（呂尚）なる乎。国は未まだ量る可からざる也」と感嘆した、とある。

そして、何如璋の「使東雑詠」第54首も東京を詠じて参考になる。

五州形勝控關東　五州の形勝　関東を控え
拱衛伊房跨斐濃　伊（豆）・（安）房を拱衛し（甲）斐・（信）濃を跨(また)ぐ
新定畿疆舊藩府　新たに畿疆を定む　旧の藩府
泱泱也有古齊風　泱泱として也(ま)た古えの斉の風有り

何は注して「東京は即ち武蔵州の江戸城、旧は将軍府の地と為す。左は下総・安房を扼し、右は駿河・伊豆を抱き、旁らは甲斐・信濃を跨ぎ、中原沃衍として、最も関東の形勝と為す」とある。王は何の第４句をそのまま使っているのである。つぎは第三首。

東照宮前日易斜　東照宮前　日は斜めなり易く
石燈璀璨樹槎枒　石灯は璀璨(さいさん)として樹は槎枒(さが)たり
山僧寂寞門常閉　山僧は寂寞として門は常に閉じ
幽鳥投林客憶家　幽鳥は林に投じ客は家を憶う

「東照宮」は、藤堂高虎・天海大僧正が寛永四年（1617）に造営し、三代将軍徳川家光が慶安四年に社殿（金色殿）を造営した上野東照宮で、初代家康・八代吉宗・十五代慶喜を奉っている。「談瀛録」巻一、十一月初五日に「午後、雨止む。車を命じて復た遊び、道に順がい東照寺（宮）に至る。寺は山巓に建つ。四面は蒼松喬木、天日を隠蔽す。中は石級を甃き、曲折盤旋す。両旁は皆な石灯を竪て、廟中の香鑪の如く、式身は略や小さきも高さは之に過ぎ、約数千盞あり。寺に近きは則ち銅を以って之を為し、古色斑駁、之を望めば武仗の森厳たるが如し。寺の後を繞りて下れば、石灯の排列すること前山の如し。樹木の草の擁覆する所と為る者有り、之を詢ねて移植為るを知る。山の麓に抵れば、前に一湖（不忍池）有り、楡柳が隄を環りて植わる。下には木凳を設け、以って遊人の憩息するに備う。湖心には亭（弁天堂）有り、一葦の杭もて、以って達するを得可し。時に日色は山を含み、暮煙は紫を凝らし、帰鴉が数点、林端に噪息す。忽ち水上に声発するを聞けば、則ち水鳧野鶩が、驚起群飛し、紛として其の幾千万翼なるかを知らず。僕を呼び車を策せしむ。初月は眉の如く、疏灯は眼を照らす。署に帰れば、已に七点鐘なり」とある。

なお、何如璋の「使東雑詠」第63首も上野東照宮を詠じていう、

叡山松柏鬱寒雲　叡山の松柏は寒雲に鬱たり
東照宮前日易曛　東照宮前　日は曛じ易し
野老不知時事改　野老は知らず　時事の改むるを
尚持錢賽故將軍　尚お銭を持ちて故の将軍に賽す

何は注して「余は上野の東叡山に遊ぶ。山には神宮有り、故の将軍東照公を祀る。宮前には松柏が環植され、寒翠は日を蔽う。野人の銭を持ち賽に赴く者は、踵相い接する也。跪づきて合掌し、喃喃として何語を作すかを知らず」とある。

また同じく第64首は、上野公園をうたっていう、

公園十里附城隅　公園は十里　城隅に附し
樹老泉湮草又枯　樹は老い泉は湮がれ草も又た枯る
剰水一泓山一角　剰水一泓　山一角
稱名曾説小西湖　称名　曾つて説う　小西湖と

何は注して「上野は東京五公園の一と為す。園側には湖有り、広さ数重畝。残冬にして水涸れ、土人は名づけて小西湖と曰う」とある。つぎは第四首。

何幸生涯水作田　何んぞ幸いなる　生涯　水を田と作(な)し
魚苗種遍幾經年　魚苗　種(う)うること遍(あまね)く　幾たびか年を経たる
珊瑚網得眞堪重　珊瑚を網し得て真に重んずるに堪えたり
街市爭售海錯鮮　街市　争い售(う)る　海錯（いろいろな海産物）の鮮(あた)らしきを

この詩は、海産物の豊かさをうたう。しかし、明らかに、何如璋の「使東雑詠」第12首の、長崎の魚市場をうたった作に和したものである。何の原作をあげれば、

澤國生涯水作田　澤国　生涯　水を田と作す
兆占魚夢即豐年　魚夢を兆占すれば　即ち豊年
鰒參帶沫龍蝦活　鰒・参は沫を帯び　龍蝦は活(い)き
曉市爭售海物鮮　暁市　争い售る　海物の鮮(あた)らしきを

何は注して「中商（中国商人）は多く海参（なまこ）・鰒魚（あわび）ら諸海錯を以って帰る。土人（長崎市民）は参も鰒も皆な生食す。龍蝦（伊勢えび）は尺に盈ち、味は尤も鮮美たり。市頭に充斥するは、大率(おおむね)魚類也。売る者は升斗を以って計る」とある。

なお、張斯桂「使東詩録」の「長崎の街市に遊ぶ」にも「一陣の腥風は吹きて市に入り、頭を担(あ)げ尺に盈つ龍蝦を売る」とある。つぎは第五首。

侵晨鍼表失常度　侵晨（夜明け前）　鍼表（時計）は常度を失い
滄海桑田轉變多　滄海　桑田　転変多し
一樣嚴冬分冷暖　一様の厳冬　冷と暖を分かち
天時如此奈人何　天時は此くの如し　人を奈何(いか)んせん

第一句に自注して「東洋(にほん)の天明は上海に較べて一点鐘早し」とある。後半二句は、中国と日本とは「一様」同様に「厳冬」の「天時」季節だが、ここ日本は「冷」寒く、もとの中国は「暖」かいというのだろう。つぎは第六首。

欲覓花磚索影無　花磚を覓(もと)めんと欲して影を索(もと)むるも無し
疏櫺帶水尚堪娛　疏櫺（れんじ窓）は水を帯びて尚(な)お娯しむに堪えたり
客來席地先還跪　客来たらば地（板の間）に席（畳をしく）して先(ま)ず還(ま)た跪づき
瀹茗同圍小火爐　茗(ちゃ)を瀹(わ)かして同(とも)に囲む　小火炉（小さい火鉢）

この詩は、一般の民家をうたうだろう。「花磚」は、唐代、皇宮中の役所にしかれた模様あ

る敷き瓦。日本には唐代の遺物が残っているという幻想に駆り立てられ、その「影」すがたをいくらもとめても、民家などにあるはずも「無」い。

第三句については、「談瀛録」巻三「東洋瑣記」に「坐するも起くるも皆な地に席す。両膝は地に拠り、腰を伸ばして危坐し、而して足を以って尻の後を承く。趺坐・蹲踞・箕踞は皆な不恭と為す。客を敬うの礼は、坐するに必らず褥を設け、旧には敷重丰席・敷重篋席なる者有り、亦た猶お古えの道を行う也」とある。

さて、これもやはり何の「使東雑詠」第10首の、長崎の民家を詠じた作に和したものである。何の原作をあげれば、

板屋蕭然半畝無　板屋は蕭然として半畝も無し
栽花引水也清娯　花を栽え水を引くも也た清娯たり
客來席地先長跪　客来たらば地に席して先ず長く跪づき
瀹茗同圍小火爐　茗を瀹かして同に囲む　小火炉

何は注して「東人は園亭を為るを喜ぶ。貧にして僅かに壁立するのみなる者も、亦た花を種えて点綴す。地を離ること尺許り、板を以って屋に架し、其の上に席しく。客来たらば履を戸外に脱ぎ、粛として入り跪坐し、炉を囲み茗を瀹かし、淡巴菰を以って相い餉す」とある。

そして、王はやはり「談瀛録」巻三「東洋瑣記」で、この何注におのれの見聞を加えて、「尤とも園林を喜ぶ。貧家も亦た花木竹石あり、位置すること幽雅なり。余は各東人の家に至る毎に、門は設けらると雖も常に関され、其の庭を行くに、闃然として人無き者の若し。客至らば、則ち寒具を出だし、或いは酒漿を呼び、妻子を出だし、跪づきて盤盞を献げしめ、雅意は殷殷たり。筆談すること半日、人声を聞かず。童を呼び茗を煮るに、則ち拍手すれば即ち至る。其の酒を嗜なみ歌舞を喜ぶは、誠に「魏志」「漢書」に言う所の如き有り」と述べる。

また、何の上海出発から東京到着までの日録「使東述略」光緒三年十月二十七日にも「俗は潔を好み、街衢は均しく砌くに石を以ってし、時時に掃滌す。民居は多く木を架して之を為す。四面の窓を開き、地に鋪くに板を以ってし、上には莞席を加え、几案を設けず。客至らば席に坐し、小炉を囲みて茗を瀹かし、紙巻き淡巴菰を以って相い餉す。室は小さしと雖も、必らず隙地を留めて、花を栽え竹を種え、水を引き魚を養い、間に山石を以って之に点綴し、頗る幽趣有り」とある。つぎは第七首。

遶屋扶蘇半倚池　屋を遶りて扶蘇（大木の枝が四方に広がる）たり　半ば池に倚り
小園邱壑路参差　小園　邱壑　路は参差たり
樓中謌舞飛觴候　楼中　謌舞して觴を飛ばす候

坐對渾如畫裏時　坐対すれば渾(すべ)て画裏の時の如し

この詩は、歌舞音曲でもてなす料亭をうたう。がこれも、何如璋が長崎の料亭を詠じた「使東雑詠」第13首に和したものである。何の原作をあげれば、

小小園亭淺淺池　小小たる園亭　浅浅たる池
藥欄酒榭影參差　薬欄　酒榭　影は参差たり
樓中歌宴紛裙屐　楼中　歌宴　裙屐紛たり
坐對渾如讀畫時　坐対すれば渾て画を読む時の如し

何は注して「長崎の山中に園有り、勝地也。山を背にし渓に臨み、翛然として塵俗の気無し。竹架の中に小さき花盆を列(なら)ぶること百十を以って計え、皆な精雅たり。園には酒家有り、別客は其の中に飲み、裙屐紛錯として、亦た風致饒(おお)し」とある。つぎは第八首。

一枝梅向客窻開　一枝の梅は客窓（客たる私の窓辺）に向かいて開き
有脚陽春海外回　脚有る陽春　海外より回(かえ)る
我欲按圖訪遺事　我れは図を按じて遺事を訪わんと欲するも
惜無人懂話頭來　惜しむらくは人の話頭を懂(さと)り来たるもの無し

第一句は、王が十一月初三日、何如璋公使に贈った「何子峨星使に贈る」詩にも「韓を瞻(み)る願いは遂げて蓬莱に到り、東閣の梅花は一例に開く」とある。いずれも唐の杜甫の「裴迪が蜀州の東亭に登り客を送りて早梅に逢い、相い憶いて寄せらるるに和す」詩の「東閣の官梅は詩興を動かし、還た何遜の揚州に在りしが如し」にもとづく。

第二句は、宋の徐元杰の「郡守を送る」詩に「心無き雲は当年の岫を出で、脚有る陽は此の地の春を生ず」とある。

3

つづいては、「談瀛録」巻二、光緒五年十一月十四日、「暇を得て、東京に見し所の者を将(も)って、之を誌すに詩を以ってし、稿を脱して寝に就く。心緒は殊に煩悶する也」という述懐のもとに収める「東京竹枝詞」全13首を見ていこう。まずは第一首。

輕圓石子本晶瑩　軽円なる石子（舗装用の石）は本より晶瑩たり
上襯白沙貼地平　上は白沙を襯(つ)け地に貼(つ)きて平かなり

處處清塵常沃水　処処の清塵は常に水を沃(そそ)ぎ
自來燈火到天明　自来の灯火（電気の街灯）は天明（夜明け）に到る

この詩は、東京の舗装された道路をうたう。第四句は、「談瀛録」巻一、十一月初一日に「東京は街に沿いて電気灯数千百盞を然(も)やし、両行の紅燭の如し。中土は即(たと)え夜夜元宵なりとも、亦た此の火樹銀花の璀璨たるは無き也」とある。しかし、前半二句のうらには、おそらく長崎の街路もあろう。

張斯桂「使東詩録」の「長崎の街市に遊ぶ」には、「祓除せる官道は浄くして瑕(きず)無く、白石を平らに鋪きて白沙を襯(つ)く」の句があり、また同じく「東京の街市に遊ぶ」には、「細白なる泥沙　一路平らかにして、大街十字　縦横たるに任す」とある。王が張の「詩録」を参照したことは、明らかである。

ただ、王は「談瀛録」巻三「東洋瑣記」で「街道は甚はだ修潔たり。某区と曰い、某町と曰い、幾番と曰う、皆な書きて門楣(もんび)の上に明らかなり。高官大府は、則ち三寸の木板を以って楣(のき)上に懸け、従幾位と曰い、正某位と曰う。又た翠瓦玲瓏、雲は門外に起こり、柱のごとく燈塔を立つる有り、夜は則ち燈を燃やす。邏者(みまわり)は時時に門を環りて巡察す」ともいう。つぎは第二首。

閈閎高大究何曾　閈閎（中国の村や巷の門）の高大なる　究めて何んぞ曾つてあらん
門戸如窻跣足登　門戸は窓の如く（小さい）　跣足(はだし)にて登(あが)る
惟有小樓精以潔　惟だ小楼の精以って潔なる有り
客來請上第三層　客来たらば第三層に上らんことを請う

この詩は、小さな門構えの東京の民家のつつましさをうたう。張「使東詩録」の「東京の街市に遊ぶ」には「矮戸は眉に碍(さまた)げあり傴僂にして入り、小車は歩に代わりて往来軽し」とある。つぎは第三首。

家家搆得小樓臺　家家　搆(かま)え得たり　小楼台
槅子臨風四面開　槅子（格子状に細い棧のついた障子の引き戸）　風に臨み　四面に開く
客到不妨同席地　客到らば妨げず　同に地に席するを
杯盤跪捧獻茶來　杯盤　跪づき捧げ　茶を献じ来たる

この詩もやはり、東京の民家と客へのもてなしをうたう。張「使東詩録」の「東京婦人」に「客来たらば地に席して郎(おっと)は陪坐し、親しく杯盤を捧げ跪づきて茶を献ず」とある。つぎは第四首。

怪他女僕解庖厨　怪しむ　他の女僕(じょちゅう)は庖厨（料理）を解(よ)くし

不管羅敷自有夫　羅敷に自のずと夫有るに管(かかわ)らず
拍手呼來如響應　手を拍(う)ちて呼び来たれば響きの応ずるが如く
便宜官許雇人需　便宜なり　「官許　雇(やと)い人を需(もと)む」

この詩は、東京の「女僕」女中・下女をうたうようだが、じつは料理屋の女給・給仕女と混同している。第一句は、中国の下女が台所仕事をせず、専門のコックにまかす、のに対していう。第二句は、「羅敷」の故事にもとづく。羅敷は戦国時代の趙の女で、あぜ道で桑をつんでいるのを趙王が見て横恋慕したが、「陌上桑」という詩をうたって夫の有ることを示し、拒絶した。しかし店の主人は、女給に夫がいようといまいと「不管」気にせずに、給仕させる。

第四句は、黄遵憲の「日本雑事詩」第115首の女中を詠じた作が参考になる。まずそれを引こう。

生來未敢學夫人　生来　未まだ敢えて（衛）夫人を学ばず（書道はできない）
曉酒司茶事事親　酒を暁(さと)り茶を司さどり事事親しむ
記得某侯年最少　記し得たり　某侯は年最も少(わか)く
花枝親揀到儂身　花枝（多くの女中たち）を親しく揀(えら)びて儂(わらわ)が身に到りしを

黄は注して「多く女僕を用う。市には媒(なかだち)を司さどる者有り、門に書して「官許　雇い人を需む」（政府の許可を得て営業、やとわれ人を求む。いわゆる口入屋である）と曰い、則ち之に詢(はか)る。旧藩の時、諸侯の朝（江戸）に入らば、呼び以って浣濯を司さどらせ、洒掃に供せしめ、亦た或いは寝に侍らせ、相い沿いて風と成る。又た婉約を以って善く人に事(つか)う。故に士夫の家は女僕多き也」という。

そしてまた、「日本雑事詩」第116首の権妻を詠じた作も、見ておく必要がある。

眉心點翠額安黃　眉心には翠(みどり)を点じ額(ひたい)には黄を安(お)く
雲鬢堆鴉學豔妝　雲鬢は鴉を堆(つ)みて豔妝を学ぶ
繡葆呱呱懷抱裏　繡葆（赤ん坊を包むおぐるみ）　呱呱（おぎゃあおぎゃあ）たり　懐抱の裏(うち)
小姑居處尚無郎　小姑の居る処は尚お郎(おとこ)無し

黄は注して「又た女子有り、名づけて外婦と曰い、又た権妻と曰う。亦た月を計りて租を輸(おく)り、以って其の家を養わしむ。朝は秦にして暮は楚、人の去り留むるに聴(まか)す。或いは子を生み、因りて買いて妾と為し、或いは子を留めて母を去る。此れは真(まこ)とに「戦国策」（巻十一、斉策四）に謂う所の「嫁がざるも、而るも嫁ぐに過ぎ畢(おわ)れり（嫁いだ者に勝るとも劣らない）」し也。鬢を両翼に分かちて鴉髻の如く＜島田髻と名づく＞、或いは蜂腰の如き＜天神髻と名づく＞は、女(むすめ)也。蛇盤髻を作して一撮と為すは、婦也。旧俗にては、已に嫁がば則ち眉を剃り歯を黒うす」

という。

第４句は、南朝宋の青渓の役人趙文韶と呉の蔣子文の妹たる女神青渓小姑との交流をうたった「青渓小姑曲」（「楽府詩集」巻四七）で、小姑は「門を開ければ白水、側らは橋梁に近し。小姑の居る所、独り処りて郎無し」と嘆く。

この黄の二首に分かれる注を、王は「談瀛録」巻三「東洋瑣記」でひとつにまとめて、「俗は多く女僕の侍る（市をこう誤る）を用ゆ。媒を司さどる者有り、其の門に書して「官許　雇い人を需む」の数字を曰う。其の由を詢えば、則ち旧藩の時、・・・又た婉孌を以って善く人に事う。故に士大夫の家は多く女僕を用ゆ。即い寓居の華人といえども、亦た均しく喜びて之を購う。又た女子有り、名づけて外婦と曰い、又た権妻と曰う。月を計りて租を輸り、以って其の家を贍わしむ。朝は秦にして暮は楚、人の去り留むるに任す。子を生まば、則ち留め以って妾と為し、或いは子を留め母を去る」とする。

そして同じく「雑事詩」第121首の娼妓を詠じた作も参考になる。

華屋明燈貸座敷　華屋　明灯　貸座敷
樓頭團坐月明初　楼頭に団坐す　月明の初め
願郎莫短纏頭費　郎に願わくは　纏頭の費を短らす莫かれ
奴是官家許女閭　奴は是れ官家の許せし女閭なり

黄は注して「娼妓は公の売淫と為す。官は其の賤業たるを以って、重く其の税を賦し、人毎に月に金三円を納めしむ。之が為に疾いを験し、之が為に逋るるを追う。私の売淫を厳禁する者、其の利を壟断せしむるなり。居る所の室は貸座敷と曰い、外には華灯を懸けて官許と曰う」という。

「女閭」は、春秋時代に斉の桓公が宮中に設けた淫楽の場所で、後には遊郭、くるわを指すようになったが、ここは、そこに勤める妓女、つまり日本語の「女郎」をいおう。清の蘇州知府だった董華の「長崎紀聞」（雍正十三年、1735）には、商人からの聞き書きにより当時の長崎の遊郭を述べて「女閭の七八百名なるを花街と曰う。楼上に居る者は、以って唐商に奉じ、楼下は以って水手を待す。妓は館に至らば終年去らず、従婢は一二人、或いは三四人、皆な鮮衣美食を商に取給す」とある。

そして、全体を通じてぜひ参考すべきは、料理屋で働く女給を詠じた同じく「雑事詩」第119首である。

當爐少女似羅敷　炉に当たる少女は羅敷に似たり
精舎安排莞簟鋪　精舎は莞簟を安排して鋪く
茶鼎酒鐺親料理　茶鼎　酒鐺　親しく料理し

語郎今夕儘歡娯　郎に語る　今夕は歓娯を儘(つ)くせと

黄は注して「酒を売り茶を売るは、皆な少女を以って炉に当つ。酒楼は料理屋と曰う」という。「当炉」は、漢の司馬相如が妻の卓文君に酒場の「炉」カウンターのところで客の給仕をさせ、自分はふんどし姿になって雑用をしたのにもとづく。

この黄の注を、王はやはり「談瀛録」巻三「東洋瑣記」で、さきの「女僕」「権妻」の文の後につづけて、「酒を売り茶を売る者は、皆な少女を以って炉に当て、人の調笑するに任すも、恬として怪と為さず。「戦国策」に謂う所の「嫁がざれば則ち（嫁がざるも）、然れども嫁ぐには過ぎ畢れり（嫁いだ者に勝るとも劣らない）」し者也」という。

また、「談瀛録」巻一、十一月初四日には、王が浅草寺を訪れたときの体験を述べて「時に遊行すること已に久しく、口は渇き茶を思う。適(たま)たま炉に当たる少婦が盤匜を捧げて来たり、跽(ひざま)づきて香茗の瓊漿玉液の如きを進む。「十二重楼（十二節ある人の喉。道教語）を透過すれば、渇く者は飲を為し易し」と。誠に然り誠に然り」とある。つぎは第五首。

雲鬟螺髻鬪新粧　雲鬟（かづら）螺髻（もとどり）　新粧を鬪わせ
風流也稱小蠻裝　風流　也(ま)た小蛮装とも称す
薙眉涅齒相沿久　薙(そ)りし眉　涅(そ)めし歯　相い沿うこと久しく
道是人家已嫁娘　道(い)う是れ人家の已に嫁ぎし娘と

この詩は、東京の女性のファッションをうたう。しかし、実は、何如璋の「使東雑詠」第11首の、長崎の女子を詠じた作に和したものである。何の原作をあげれば、

編貝描螺足白霜　貝を編み螺を描き足は白霜（のごとく）
風流也稱小蠻裝　風流　也た小蛮装とも称す
薙眉涅齒緣何事　薙りし眉　涅めし歯　何事にか縁(よ)る
道是今朝新嫁娘　道う是れ今朝　新たに嫁ぎし娘と

何は注して「長崎の女子は已に嫁げば、則ち眉を薙りて其の歯を黒うす。国を挙げて旧俗は皆な然り、殊(こと)に怪む可しと為す。而るに装束は則ち古秀にして文あり、仕女図を観るが如し」という。

また、足の白さに関係するのは、張「使東詩録」の「東京の街市に遊ぶ」に「途に沿う少婦は双趺(あし)白く、襁(むつき)（背負いおび）もて嬰児を負い得得として行く」とある。

ところで、王は日本女性の髪形の美しさを「雲鬟螺髻」と形容したが、かれより五年ほど前の中国人も同様に形容していた。同治十三年（1874）、上海の新聞「申報」に連載していた洛

如花館主人の「春申浦竹枝詞」の一首は、当時上海租界の虹口に居住していた「日本女妓」をうたっていう、

霧鬢雲鬟頂上堆　霧鬢　雲鬟　頂上に堆(つ)み
衷衣有否漫相猜　衷衣(したぎ)は有るや否や　漫(みだ)りに相い猜(うたが)う
不關謝傅遊山興　謝傅（太傅の官についた謝安）の遊山の興に関わらざるに
何事無端着屐来　何事ぞ　端無くも屐(げた)を着して来たるは

注には「日本の女妓は鬟髪は雲の如く、足には木屐(げた)を穿(は)き、又た相い伝えて内には短褲(パンティ)無しと云う」とある。後半２句は、東晋の謝安が東山の別荘で妓女とたわむれ、また下駄ばきで遊びに来たことにもとづく。

さらに、王は「談瀛録」巻一、十一月初一日に、東京の女性をうたった詩二首を載せる。「竹枝詞」に関係するので、紹介することにしよう。まず、「東京婦人」から。

高髻雲鬘大袖垂　高髻雲鬘　大袖垂れ
少年裙屐亦丰姿　少年の裙屐も亦た丰姿
項前塗粉連胸涴　項前に粉を塗り胸に連なり涴(えん)として
背後拖紳稱體宜　背後に紳を拖(ひ)き体に称(かな)いて宜し
可惜雙眉芟以盡　惜しむ可し　双眉は芟(そ)り以って尽き
生憎皓齒涅而緇　生憎たり　皓歯は涅(そ)めて緇(くろ)し
無襦無袴休嫌冷　襦無く袴無きも冷たきを嫌うを休(や)むるは
只爲心腸有熱時　只だ心腸に熱時有るが為なり

おそらく参考にしただろう張斯桂「使東詩録」の「東京婦人」には「嬰児は襁もて負われ娘は裙屐、宮眷は鬘垂れ俗は髻丫たり。帰妹（易の卦で、結婚にかたどる）は期に及びて眉は豹を鞹(と)り、使君は婦有りて歯は鴉を塗る」とあり、注して「婦人已に嫁がば、則ち眉は皆な剃り落とし、歯は皆な涅めて黒し」という。

つぎも王の「東京女子」。

修眉皓齒髮如顰　修(なが)き眉　皓き歯　髪は顰(くろ)の如く
猶是深閨未嫁身　猶お是れ深閨の未まだ嫁がざる身
荳蔻含香宜帶雨　荳蔻は香りを含みて雨を帯ぶに宜しく
海棠爲屐豈無塵　海棠は屐と為して豈に塵無からんや
金訶貼乳唐妃子　金訶（ブラジャー）もて乳に貼る　唐の（楊貴）妃子

羅韈凌波晉洛神　羅韈（絹の足袋）もて波を凌ぐ　晋の洛神（宓妃）
不媿此邦爲日出　媿(は)ぢず　此の邦は日出為(た)るに
勝他南國有佳人　他(か)の南国に佳人有るに勝(まさ)る

第五句は、清の袁枚の「随園詩話」巻十三に「又た、和凝の詩の「蝤蠐(しゅうせい)領上　訶梨子(かりし)」、人は多く解せず。朱竹垞（彝尊）曰わく、「訶梨は、婦女の雲肩也」と。呂種玉の「言鯖」に云う、「（安）禄山は爪もて楊（貴）妃の乳を傷つけ、乃ち金訶子を為(つく)り以って之を掩う。或るもの云う、即ち今の抹胸(ブラジャー)、と」」とある。

張「使東詩録」の「東京女子」は「犀歯蛾眉　暁装を闘わせ、小姑は猶お未まだ彭郎に嫁がず。（宋の蘇軾の「李思訓の画ける長江絶島図」詩に「舟中の賈客よ漫りに狂う莫かれ、小姑は前年彭郎に嫁ぐ」とある）襟を披きて金訶子もて掩わず、屐を曳きて響屧廊を行くが如し。意の如き鴉雲　螺は髻せず、胸を払う蝶粉　麝は香り無し。等閑なり　親しく蘭湯の浴を試み、笑うて人前に向いて綉裳を卸す」とうたい、第1句に注して「女子は未まだ嫁がざれば、皆な修眉皓歯。已に嫁がば、則ち否なり」、第５句に注して「女子の頭を梳くは、皆な意の如き式様にして、髻を挽くを得ず」、第６句に注して「女子は皆な胸を露わす。故に頸自り胸に至るまで皆な粉を傅(つ)け、甚はだ白し。然れども粉は粗にして劣り、中国の宮粉の香りに及ばず。（唐の）李商隠の（「崔八が早梅に贈る有り兼ねて示さるるの作に酬ゆ」）詩に「胸を払うは蝶粉に資(と)る」」という。

ところで、第４句については、ほぼ同時の呉友如が「申江勝景図」（点石斎印書局、光緒十年、1884）巻下で上海租界の日本式遊郭「美満寿茶楼」を描いた第24図「東洋茶楼」に配された、日本妓女をうたった３首の竹枝詞の第２首をあげよう。

入座慇懃勸客嘗　座に入らば慇懃に客に勧めて嘗(あじわ)わしむ
時新茶點出東洋　時新の茶点　東洋(にほん)より出づ
屐聲散入西風裏　屐声は散じ入る　西風の裏(うち)
疑是呉宮響屧廊　疑うらくは是れ呉宮の響屧の廊かと

「響屧廊」とは、春秋時代の呉王の宮中の、よく響くよう下に隙間を設けた廊下で、王は美女の西施に下駄ばきで通らせ、その音を鑑賞したという。

また、黄遵憲の「日本雑事詩」第114首の、女子を詠じた作も参考になる。

十種金仙數曼殊　十種の金仙　曼殊を数え
中多綽約信蓬壺　中に綽約たる多く　信(まこ)とに蓬壺
紅珊簪子青羅繖　紅珊の簪子(かんざし)　青羅の繖(かさ)

散作人間仕女圖　散じて人間仕女の図を作す

黄は注して「女子は皆な膚は凝脂の如く、髪は漆の如し。蓋し山川清淑の気の鍾まる所也。宮装は皆な髪を被り肩に垂らし、民家は古えの装束多し。七八歳の時、丫髻は双つに垂れ、尤も人に可しと為す。長ずれば、耳は環せず、手は釧せず、髻は花ささず、足は弓鞋せず。皆な紅珊瑚を以って簪と為し、出ずれば則ち蝙蝠傘を携う。帯は寛きこと咫尺、腰を囲むこと二三匝、復た倒しまに巻きて直に之を垂らし、襁もて負う者の如し。衣の袖は尺許り、襟は広く、微かに胸を露わし、肩脊も亦た尽とくは掩わず、粉を傅くるは面の如く然り。殆んど「三国志」の所謂る「丹朱もて身に坌る」者耶。「志」は又た言う、「男女は別無きも淫せず」と。今夫婦は偕に行き、婦は媚び士は依る風致有り。客を見れば礼を作し、挙止に羞渋の態無く、然も狎れ昵づかず、猶お古風也」という。

ところで、この黄遵憲と同様の感想を、のちの黄式権は「淞南夢影録」（申報館、光緒年間、1884年ごろ）巻三のなかに、上海の日本妓女についての感想として、もらしている。

日本の女子は皆な膚は凝脂の如く、髪は髹漆の如し。幼時、双髻は肩に垂れ、憨痴愛す可く、大いに「妾の髪は初めて額を覆い、花を折りて門前に劇むる」（唐の李白の「長干行」）の意有り。長ずれば、則ち雲髻を高く梳き、飾るに珊瑚或いは犀角の簪を以ってす。腰は長帯もて囲み、闊さは尺許り、長さは丈外に至り、倒しまに巻きて其の余りを垂らし、襁もて負うが若く然り。唇は泥金を塗り、以って美観と為す。

また「東京竹枝詞」にもどって、つぎは第六首。

用夷變夏竟如何　夷（日本）を用い夏（中国）を変うるは竟に如何
爲問東施效得無　（私は）為に問わん　「東施は效い得たるや無や」
漫笑儂言多鹵莽　（君は）漫りに笑う　「儂が言は鹵莽（軽率、粗雑）なる多し」と
還期大事莫糊塗　還た大事を期す　糊塗（ごまかす）する莫かれ

第二句は、「荘子・天運篇」の、美女西施が心の病で顔を顰めたのを見て、美しいと思った醜女の東施が、西施のまねをして顔を顰めたところ、それを見た者はみな逃げ出した、という故事「東施效顰」東施が顰めに效う、にもとづくが、ここは意味がすりかわって、美女の西施（中国）がわざわざ醜い東施（日本）のまねをする、「效顰東施」顰めを東施に效う、となっている。そんなことをする必要があるのか、と王之春は揶揄しているのである。

そして、参考となるのは、呉友如の「海上百艶図」巻下、ずばり「顰效東施」と題する第49図で、当時の上海の名妓が「東洋妝」日本女性の装いを真似して和服を着ているさまを描く。

つぎは第七首。

歩上歌樓賣酒家　歩みて上る　歌楼　酒を売る家
呼來小妓是蠻娃　小妓を呼び来たれば是れ蛮娃
懐中抱得纖腰鼓　懐中に抱き得たり　繊腰の鼓
不用椎敲用手撾　椎(ばち)を用いて敲(たた)かず　手を用いて撾(う)つ

この詩は、東京の芸妓を詠じたものだろう。これもやはり、黄の芸妓を詠じた「雑事詩」第118首を参考すべきである。

手抱三弦上畫樓　手に三弦を抱きて画楼に上り
低聲拜手謝纏頭　低声にて拝手し　纏頭(はなだい)を謝す
朝朝歌舞春風裏　朝朝　歌舞す　春風の裏(うち)
只説歡娯不説愁　只だ歓娯を説きて愁いを説かず

黄は注して「歌舞を業とする者は芸妓と称し、酒筵に侍ること頗る矜荘なり。楽器は止だ阮咸を用い、曲は梵音（仏教音楽）に似、牙(ばち)を以って弦を撥(はじ)く。又た細腰の杖鼓有り。手を以って之を拍(う)つ。鼙鼓は双槌もて撾撃し、淵淵乎として金石の声を作す。舞う者は扇を以って節を為し、腰を折る・手を垂るの諸態有り。甚はだ唐・宋の営妓・官妓に類す。士夫が聚まり飲めば輒ち之を呼び、怪しと為さず」という。つぎは第八首。

明眸皓齒態嫣然　明眸　皓歯　態は嫣然たり
不避生人入綺筵　生人（初めての客）を避けず　綺筵に入る
笑語相迎嬾作答　笑語して相い迎え　答えを作すに嬾(もの)うし
故持牙板弄三弦　故(ことさ)らに牙板(ばち)を持ちて三弦を弄す

この詩も、芸妓を詠じたものである。つぎは第九首。

臉波横處水盈盈　臉波横(いろめつか)いし処　水盈盈たり
稱體衣裳楚楚輕　体に称う衣裳は楚楚として軽し
幾輩嬉遊慣成隊　（清国人は）幾輩か嬉遊して隊を成すに慣れしゆえ
覷人笑指南京生　（芸妓は）人を覷(み)て笑い指す　南京生と

この詩も、芸妓を詠じたものである。「南京生」は、当時の清国人をいおう。つぎは第十首。

白足娉婷踏踏謌　白足は娉婷として踏み踏み謌(うた)い
衣香人影兩婆娑　衣香　人と影と両つながら婆娑（身を翻して舞う）たり
巫山可恨無重譯　巫山　恨む可し　重訳無きを
言語難通可奈何　言語の通じ難きは奈何(いか)んす可き

この詩も、芸妓を詠じたものである。第一句は、明の高啓の「楊白花」詩に「美人は（足を）踏み踏み臂を連ねて歌い、山長く水闊くして儞(なんじ)を奈何んせん」とある。第三句の「巫山」は、四川省巫山県東の山で、男客と芸妓の情交を暗示する。楚の襄王は洞庭湖近くの高唐の高台に遊び、夢に巫山の神女と交わったが、神女が去るとき、自分は巫山南の高丘に住み、朝は雲、夕は雨となると告げたという。つぎは第十一首。

纖弓短箭坐登場　纖弓　短箭　坐(そぞ)ろに登場し
左右奔趨是女郎　左右に奔趨するは是れ女郎
中得雀屏如擊鼓　雀屏に中(あた)り得たらば鼓を擊つが如く
好將軼事話隋唐　好し　軼事を將(も)って隋唐を話さん

この詩は、神社の境内や盛り場などで、料金を取って、楊柳で作った遊戯用の小弓「楊弓」で遊ばせる店、楊弓場、矢場を詠じたものである。本来は懸け物で、当てた的の位置や種類によって商品・賞金が振舞われた。第二句の「女郎」は、矢取り女で、客の放つ矢を掻い潜って矢を拾い集めるのが芸であり、客も楽しんだ。そして、店によっては、賞品のかわりとして、ひそかに売淫もした。

後半二句は、「隋唐」の交代期における唐朝の高祖と皇后の「軼事」エピソードにもとづく。「旧唐書・后妃伝上・高祖太穆皇后竇氏」によれば、皇后の父で隋の定州総管だった竇毅は、娘の結婚相手を決めるにあたって、「乃ち門屏に於いて二孔雀を画かす。諸公子の求婚する者有らば、輒ち両箭を与えて之を射しめ、潛かに目に中(あた)る者に之を許さんと約す。前後数十輩は能く中る莫し。高祖は後に至り、両発して各おの一目に中る。毅は大いに悦(よろ)こび、遂に我が帝に帰(とつ)がしむ」とある。

そして、これもやはり、黄「雑事詩」第120首の、楊弓店を詠じた作が参考になる。

銀燈懸鵠插雕弧　銀灯　鵠(まと)を懸けて雕弧（華美な弓）を插(さしはさ)み
孔雀屏開列畫圖　孔雀の屏開きて画図を列(なら)ぶ
左右射來齊中目　左右より射来たりて斉しく目に中(あた)れば
拍肩都道子南夫　肩を拍ちて都(すべ)て道(い)う　子南は夫なりと

黄は注して「射所は、紅い氈毹を地に鋪き、彩を縛りて棚を為し、中は蒙うに皮を以ってす。竹の弓・翎の箭もて、相い去ること尋丈、中ら者、鏗然として声を作す。雛姫（矢取り女）は環まき侍り、互いに其の肩を拍ち、以って笑楽と為す。蓋し之を北里（遊郭）・南瓦（娯楽場）に比す。其の場に顔して楊弓店と曰う」という。

第４句は、「春秋左氏伝」昭公元年によれば、鄭の徐吾犯の美しい妹にたいして、公孫楚、つまり子南と、公孫黒、つまり子皙の二人が結婚を申し込んだ。徐吾犯は妹自身に選ばせたいと申し入れたところ、二人とも承諾した。公孫黒は華麗に着飾って入り、礼物を陳列して出ていった。公孫楚は軍服を着て入り、左右に弓を射、一躍して車に乗ると出ていった。妹は部屋から二人を観て、いうことには、「子皙は信とに美なり。抑れども子南は、夫也。夫は夫たり婦は婦たり、所謂る順也」と。そこで公孫楚に嫁いだのである。

ところで、面白いのは、王の訪日と同時の1880年代初頭、上海租界では日本人が経営する遊郭「東洋茶館」に付設して、日本と全く同様の楊弓店「東洋箭館」が開業していたことである。たとえば、光緒二十年（1894）刊行の呉県・藜牀旧主編「新輯上海彝場景緻」（管可寿斎刊行）巻三はその様子を詳しく述べていう、

> 革鼓を懸けて的と為し、画くに彩色を以ってし、障ぎるに軟簾を以ってす。鼓より距つること一歩の外に、横ざまに長卓を放き、一卓の上には尺許りの小弓箭及び手巾・洋糖等の物を置く。客至りて、番面銭一小枚を輸さば、箭二十枚を給し、之をして鼓に対して之を射せしめ、紅心に中る者は例として贈物を得たり。其の中の応使の人は類むね皆な扶桑の妙妓にして、苟しくも往来既に稔なれば、肚を捉み胸を捺うと雖も、亦た禁ぜ弗る所なり。彼中の人は名づけて勧進と曰う。

つぎは第十二首。

> 全憑遊戯作生涯　全て遊戯に憑りて生涯を作し
> 十二僚丸一局開　十二僚丸　一局開く
> 弄玉人来思弄玉　玉を弄する人来たりて玉を弄するを思い
> 等閑引上鳳凰臺　等閑に引き上ぐ　鳳凰台

この詩は、おそらく球を抛り投げる曲芸を詠じたものだろう。第二句の「僚丸」は「千字文」に「（呂）布の射に（宜）僚の丸、嵇（康）の琴に阮（籍）の嘯」とあり、「荘子・徐无鬼篇」に「市南の宜僚は丸を弄して両家の難解く」ともあるごとく、楚の荘王の勇士たる熊宜僚が「丸」玉を「弄」する手並みのすばらしさをいう。ここは一度に「十二」個の「丸」玉を空中に抛り投げてあやつる曲芸をいうか。

後半二句は、また「列仙伝」巻上にいう、簫を吹いて鳳鳴を奏でる名手蕭史が秦の穆公の娘弄玉に吹簫を教え、それぞれ鳳と竜に乗って昇天した故事も、うちにひそめていよう。つぎは第十三首。

小車代歩快如梭　小車は歩みに代わりて快(はや)きこと梭(ひ)の如く
健僕無衣盡力拖　健僕は衣無く　力を尽くして拖(ひ)く
若要中途行緩緩　若(も)し中途にて行くこと緩緩(ゆっくり)たるを要(もと)むれば、
須操倭語叫唆囉　須べからく倭語を操(あやつ)りて唆囉(そろ)と叫ぶべし

この詩は、人力車を詠じたものである。これもやはり、黄「雑事詩」第139首の、人力車を詠じた作を参考せねばならない。

三面襜帷不合圍　三面の襜帷は合囲せず
雙輪捷足去如飛　双輪　捷足　去ること飛ぶが如し
春風得意看花日　春風　得意　花を看る日
轉恨難歌緩緩歸　転(うた)た恨む　緩緩帰を歌い難きを

黄は注して「小車は形は箕(み)の若く、体勢は軽便、上は小帷を支え、亦た巻き舒(の)ばすに便なり。一人を以って之を挽(ひ)き、其の疾(はや)きこと風の如く、竟に能く両馬の車と先後を争う。凡そ車を牽く者は日に能く二三百里を走り、亦た絶技也」という。

そして、面白いことに、王は「談瀛録」巻三「東洋瑣記」で「小車」を説明するのに、黄のこの注をほぼそのまま使っている。異同としては、「軽便」の後に「即ち上海の所謂る東洋車也」を加え、「亦た巻き」を「殊に展(の)ばし」に換え、「挽き」の後に「而して行く」を加えているだけである。

第３句は、唐の孟郊の「登科の後」詩に「春風得意　馬蹄は疾く、一日にして看尽くす長安の花」とある。

第４句は、王「竹枝詞」第三句にも関係するが、宋の蘇軾の「陌上花」三首に「遺民は幾度か垂垂として老い、遊女は長歌す　緩緩帰を」とあり、「引」に「九仙山に遊び、里中の児の陌上花を歌うを聞く。父老云う、「呉越王の妃は毎歳春には必らず臨安に帰る。王は書を以って妃に遺(おく)りて曰わく、「陌上の花開かば、緩緩として帰る可し」と。呉人は其の語を用いて歌を為(つく)り、思いを含むこと宛転として、之を聴かば凄然たり。而して其の詞は鄙野、為に之を易う」と云う」という。

また、「談瀛録」巻一、十一月初六日の終わりに「東洋の人力車に坐し、飢えを忍びて寓に回(かえ)る」と記した後、王は人力車をうたった「東洋車の歎き」四言詩を載せており、それには「前

行するに懦なる無く、爾(なん)じは挽き我れは坐す。銭有らば軒(くるま)に乗り、銭無ければ駄を負う。(一解)

誰か此れを為すと問えば、東洋(にほん)自り出づ。以って歩みに代える可く、周行を誤らず。馳駆すること馬の若く、我が心は憂い傷む。(二解) 豈に傖父(いなかもの)無からんや、彼の怒りに逢う。車夫は上前し、謂う「公よ怒る勿(な)かれ。駟馬の高車に、胡(な)んぞ駕馭せ弗(ざ)る。将就して車に上れ、人の路を礙(さまた)ぐる勿かれ」と(三解)」とうたう。

さて、以上、「東京雑詠」「東京竹枝詞」の諸詩を詳細に検討してきた結果としていえることは、まず日本観察の使命をおびて日本に派遣された王之春が、正式な報告書ともいえる「談瀛録」の「東洋瑣記」などの書きぶりとは異なり、これらの諸詩ではかれ自身の興味の赴くままに詠っている、それゆえ作り方においても歌いぶりにおいても、かなりリラックスしており、かなりいい加減なところもある、ということである。じっさい、かれの詩作に取りこまれている「三絶」何如璋、張斯桂、黄遵憲の詩集の密度たるや、驚くべき程度に達しており、王の詩集のなかにかれのオリジナリティーはどれほど存在するのか、疑問視したくなるほどである。

しかしこのような状況こそが、清朝末期の知識人たちの詩文創作にまつわる磁場の実態であり、おそらく非難されることもなかっただろう。そして、かれら知識人相互の理解や交流をぎゃくに深めることになったろう。つまり、かれら特有のコミュニケーションの様態を示しているのである。そういうわけで、王の諸詩に反映した日本観察は、かれ独自のものでなく、先行する三人とともに作り上げたものといったほうがよい。しかし、それがかえってわれわれ日本人に、東京に焦点をあてたかれら中国人のすこし歪んだ日本観をより確かに伝えてくれている。そして、かれらの詩作によって、かつて確かに存在したにもかかわらず、いつしか日本人の視野から消えた明治時代の社会・風俗・文化の一面がわれわれの前に再び現われたことは、日本人論の新しい根拠になりうるものであり、日中文化の比較研究のより広く深い展開にも寄与するに違いない。